應募創作九篇に對する批評

○　秋田實

應募の小說戲曲總て九篇、誠にあはたゞしく讀過した感想を披瀝するのであるが、未だ世に出てゐない作家の無數の作品の中から、眞に偉いものを發見する機會のさう容易にないとひとしく、作者を識ることを許されないで只その作品の一篇を讀むだけで、何とか評をせねばならぬと云ふことになると、茲に大なる不安が生し從つて多少躊躇の念が湧く。申すまでもなく作品は人格の所產であるから、これを讀むことに依つてその主たる者が髣髴と感じられて來る、これを捉へることがまた批評するものゝ創作でもあらうが、何れの作品にも必ずその僞らざる人格が籠つてゐるものとき めてかゝることは出來ぬことであらう、作家の手腕の未熟なる爲めの場合は勿論、故意に自己と云ふものを入れないやうに若しくは表はさぬやうに務める一派もある、又人格と云ふやうなものゝ表はれてゐる場合にしても、所謂馬子にも衣裝と云つて、衣冠束帶のこともあれば布子一枚三尺帶で頰被りして出て來ることもあらう、時には借衣裝もあり裏返へしに被て居る時もあらうし、或は泥棒して來たもので飾つて平氣でお目見わする奴もある、なか〳〵兵隊檢査のやうに眞裸にして前後左右上下からまで見るわけに行かぬ、據處なく見てくれの良いものから取ることになる、さうなる

と十人十色、人の趣味なり立場なりに依つて好惡が違つて來ることは已むを得ぬ、そこを多數決で採點すると云ふので、吾人も評者が出來た、蓋し讃める者に聽いて得意になるとも、貶されて悲憤の涙にくれやうともそれは作者の勝手である。

『第二の母』 要るだけの人物を出して作者の心持なり意見なりを會話で云はせてゐる、悲しいとか嬉しいとか作者の效能書說明付でないだけ聞くものに自由がある、內容は同じやうに繼母を持つ男の人が「人生に物足らなさを感するは愛なきによる、身体を享けたのは第一の母であるが、第二の母よりは母性の强さより來る偉大なる精神を得たと思ふことによつて心に平和がある、繼母には純な心で向はねばならぬ」と敎へてゐる、妙にエゴイストの說であるが相手の女性は素直に首肯してゐる、戀するものゝ妄信からではない、しかしどう思つて見てもあの繼母の胸の中に彼が云ふ如く實母が微笑してゐることは考へられない、性格の溫良な親切な人ではあるけれ共繼母である、そこに何か知ら親しみ難い或物がある、これあるが爲めに遂に救はれ得ないと云ふ心持を描いて、筆も輕く、朝鮮の背景なども面白くかゝれてゐる、大体から云ふとかうしたローマンチックなものにありがちのこしらへすぎた傾向があつて、物が小さい、主人公と見るべき女性がよく出てゐないのは研究が足らぬのとうるほひが無い爲めと心づく。

天平感寶元年五月十五日の大伴家持。行きつまつて了つたものが何か新しい珍らしい趣向はないかと考へた末に思いついた古物いぢりひとしきり流行したものです、何しろ此時代には一向緣故がないので、これは史實だらうかなど自分ながらをかしい考が浮ぶ、大方物の本に基づいて思ひ付かれた作物であらう間違ひだらけながら出所のある名文句が引用されてある、讀んでゐて文字通りに作つた物だなと思ふ、主人公家持は天平と云ふ時代の屏風を引きまはして坐つて考へてゐる、何も今頃蘇つて云はねばならぬ程の發明があるわけはないのです、作者も天平時代の人であつたら差支へないが古雅樣を珍重す

ると同じ趣味で見て貰ふ以上には望まれまい、それで繰り返へして云ふ天平――の家持は己がすぎこし生活に省みて若い者の現在に理解のある考が浮ぶ、かう分別臭くなつた自分と云ふものを思ふと何とはなく淋しい、かうした心持は今日の人にも共鳴する處があるそこを作者は狙つたのであらう、何はともあれ招かるゝまゝに想像の翼に乘つて足の裏の地につかぬやうな生活から離れ得て一刻でもあの靜かなゆつたりとした大宮人の境地にゐて見ると、いかにもなつかしいアットホームな氣分にひたされる、作者はやさしい情のある人であらうと思はれる、しかしあの聲で蜥蜴喰ふ何とかもあるから、憐つぽい文句で知らぬうちに釣られてゐるのかも知れないと云ふ心が起る、それは私の僻みばかりであらうか。

戯畫。 堂々小說であると名乘り上げて居るが全くコケ嚇し、惡醉前後のスケッチ耻辱の日記として秘め置く程度のものと思ふ、物になりさうな處へ一寸觸れたと思ふともうその後がなくて節を進めて行く本道でもない處を隨分余計な形容詞で飾り立てゝゐる、全く顏にそぐはぬ厚化粧の類です、纖細な處もない、と云つて荒削の大きな感じもせぬ、極く短いものであるから(一)(二)(三)(四)など大袈裟な切り方をせぬで何とかうまくさつぱりとまとめる工夫はなからうか、宿醉の苦しさはさることながら「痛切の體驗」とは凄しく、文末の「たまらなく淋しくなつて來た」に至つは全くたまらない齒が浮くやうです。

意味なき離合。 私には此意味が分からなかつた、新しい言葉の辭典にあるやうな文句が盛に使はれてゐるだけに狙い處もやつぱり此頃の人のそれである、「どうすることも出來ぬ」と云ふ宿命的觀念を持つてゐてしかも樂天的性情だと云ふてゐる主人公は、孤獨の興味に徹底して行かんとする狂的遺傳を有する友人の手紙を笑つてゐるが、焉ぞ知らん夫子自身全く同じ傾向の性格でなければ作者の描く人物が一種の類型に陷つてゐるのだ、主人公は自ら心付かぬ第二人格と

の矛盾より現實界の葛藤への誘惑を感じ、眞摯なる吾人を欲する心が起つたと云ふ、そこに否むべからざる性的好奇心の刺戟が加つて兼ねて事件を益々發展させ、遂に人を慕ふてやまざる狂人と出會對立するに至るが、結局は何處まで行きても彼岸には達せられなからう、元來が病的欠陷があるからです、描寫は細かく、自然美建築美などに對する觀賞眼も見ゐるが『第二の母』に比して大ざつぱな荒い感じがする。

春より夏へ。自然の景は命題の手前に對しても丹念に描かれてゐるが、事件と事件、場景と場景とが聯絡もなく突拍子である、全く融合渾一と云ふものが欠げてゐる、大体誰が書いてゐるのか始終中心點が消失するから描寫に珍妙な處がある、殊に最後の結びの如きは天降り的で拜んでよいのか逃げ出さねばならぬのか迷つて了ふ詰局日記延長飴細工でなからうか。

或男の手記。別に變つた材料でもないものを思ひ切り澤山集めたものだ、可成り大きな圖態となつてゐる（不圖救世軍の「ときのこゑ」へ聯想が走る）しかし材料はとにかくねつちりねつちり書きつゞけて行くうちに油が乘つて切て、初めのたど〳〵しい危つかしいにも似ず達者で、兎に角云ひ度い處まで漕ぎつけてある、內容は頗る古くてそれを手紙の型にしたのも鼻につく、氣の毒なことには作者の體驗でないと思ふ先入見の爲めか氣の拔けたビールのやうです、酒は酒にちがいはなからうけれ共。

勝者の喜びと悲しみ。名づけ得たり名題！、高等學校入學試驗にパッスして天下の優勝者なりと自ら宣言して出たエライ天才の隨筆で十七回三十六枚に及ぶ折角苦心して判斷しながら讀んだが冗談ぢやない後には全く何も殘らないうたかたの水の泡です、叔母樣と云ふ人の仰しやる通りです、何よりの孝行は折角勉強のこと、何とかの神童、只の人で終らぬやう。

涙の日記。姉の死を悲しみその思出涙の日記となると前置きして實に長々と說明をやつての後に藥にすれば一日分程三日の日記と稱するものが申譯ばかりにつけてあり多方感心したものであ

らう英文まで添へてある、その事實と作者の心情は同情に値するものであるがこの作そのものはすべての點に於て拙劣である殊にわざ〳〵五高の名など引出してあるなどアテ氣笑ふべし。

史劇山田長政後日譚。さすがに劇に手をつけるものが少く應募中只此一曲を得た。

反逆大臣の息と長政の娘とを捉へて敵味方の戀の破綻、一は外國人らしい心持（大分日本化してゐるが）を持たせ、一は日本魂と云つたやうなものを持たせてから合はせをさせ兩方たぢ〳〵と來て悲劇となる、舊いなら舊いでそれでよいからせめて型だけでもと云ふ處を科白なんかてんで練れてゐない、舞台であんな言葉を云はせたらをかしなものだらう、セクスピア物語を出し理屈を省いて日本芝居にしたやうなもの、筋がぐん〳〵運んで短いフイルムのキネマのやうでした可愛想とも何とも思へないこれを批評するは余計な仕事と思つてやめる。

○　河瀨嘉一

選をしたからには一言させて頂きます。思想取材手法情調を頭に置いての事です。

涙の日記　いとしい姉を失した人の心を寫したら恁うもあらうかと思はれますが、統一がありません。矛盾があります。餘りに感傷に馳せすぎて居ます。勘一の讀書追憶外出、これ等に一縷の脈絡がなくてはなりますまい。筆者將來一段の精進を切に祈ります。

戯畫　いつれに寢てるかと訝かる所から爛れたアルコホルの臭を吐きながら曉の廊下を行く邊りはいゝ對稱と思ひます。二の己を忘れて友に走り寄るところ、四のカリカチユアが出でせう。一の人物場所の具體想見がありません。三の自問自答は微温。ともかく若い人の實感を空想に綯ひ交せての官能描寫を面白く拜見しました。叙述の簡素を望みます。

第二の母　父を無みして亡き母をのみ慕ふ俊子が國雄ゆゑに其の亡き母をも懷かしがる。今の母

を愛しないのでは無く愛し得ない惱。これはよく頷かれます。想見の足りない點が無いでもありませんし、無くもがなの挿話もありますが、若し筆者獨特の手法を用ゐられたら、先づは結構に拜見されませう。

天平感寶元年五月十五日の大伴家持　教喩史生尾張の昨歌一首が骨子となつてこれ丈のものになつたのを多とします。史生が去つた後で、いつか歌人がそれに相應しい氣持になつて行くところを取ります。天平と越中、時と處、家持、少昨の先妻、これ等を篤と考に入れて頂きたかつた。考證でないと云はれれば夫れまで。新しい扱方をしたにしても時代錯誤でないかと思はれる節は避けて頂きませう。天平の氣分がこはれます。先づいかにも卒の無い纏つた處を推して第一の作。

山田長政後日譚　物語を脚色しただけでは物足りません。どうしても劇化しなくてはならぬ必然がなくてはならぬ。舞臺裝置だけは完全に示して置くのが本當でせう。興趣本位。性格描寫ではもとよりオインを取ります。

勝者の喜びと悲しみ　生活斷片の平叙。十七にも別けて書くとは悟さんではないが氣が多すぎるではありませんか。十七の母を後にして云々は突き込んで書いて頂きたかつた。

意味なき離合　他を離れようとして離れ得ざる苦。他に接しようとして接し得ざる惱。此の二つを强調して置くに止めたらいかゞ。前半の孤獨と自然愛好とを說明して來て置いて後半の多九との會合に終らしたいものです。

春より夏へ　取材過多。描寫多岐に亘らぬやうに望みます。本山へ一人ゆく邊りが書けて居ます後半の信仰に入るところは書き方を少し急がれた樣です。

或る男の手記　惡い血を受けて生れて來た「私」が誘惑されたものが罰せられ誘惑したものが罰せられないと悟つてから、いつか惡に染み込んだが翻然悔悟、信仰生活に入りすべての人を呪はうとしたと同じくすべての人を愛しようと一念發起したは見事、聽ては口にするも恥かしい罪を犯して獄に入る。これ丈ならば何も申すことはありませ

んが、此の作の結極ではさうでないらしいのです取材が餘りに多すぎて一篇に盛上げるには惜しい氣がします。食物だつたら食傷します。確かに筆を省かねばならぬ處があります。前後に腑に落ちぬところがあり、女性を除いては出入の人物が名だけ解ります。「私」との交渉は薩張りです。「あなた」に懺悔告白して過去一切を離縁すると稱してかう云ふものを送られては、「あなた」に「私」を結びつけた因縁に「私」から厚く感謝しなくてはなりますまい。「あなた」を設けて好きな事を並べたやう。絮いやうですが首尾一貫したものを書いて頂きたい。

終りに臨んで總てに對して申します。彼も書いて見よう、是も書いて見よう、是も拜借、彼も拜借ではなりません。狙うたところに就いて書かずに置かうとしても置かれないと云ふ氣に促され、さうしての發表であり表現でありたいものです。妄評多罪。

（大正九年十二月二十五日）

○ 無何有鄕人

今度の懸賞文九品に就きて、總體的に斷案を下すと、乍遺憾執れも皆、小器用な模倣と言つた樣な傾が有る。

時流を趁ふに急なるの餘り、想に形に、更に一新奇軸を出さずんば止まじと言つたやうな、天晴れ進取的な、洵に青年に似つかはしい猛烈果敢にして、而も末賴母しい意氣込みの、一向に認められないで、徒に後塵を拜し、先蹤を追求するに汲々たるの概あるは、情ない心地のせないでも無い。

怎うした高級な要求を、應募者諸君の現在に爲すは、爲す者の方に無理があらう。寧ろ此處其處にほの見ゆる文才の凡庸ならぬ閃きと、惣じて淀み無く、流れて居る水莖の筆の跡とに、隨喜し、浦優しう其缺點を指摘するが穩健であらう。しかせざれば、將來甚麽に結構な花實が咲かうやら、頓と見定めの附かない珍花名木を、あつたら嫩葉の中に、無慙〳〵蹂躪し了はらぬとも限らぬと說く人もあらう。

併し這うした評者の態度、被評者を或意味に於てお坊ッちやん扱ひにした振舞ひは、兩者の距離が少くとも可なり遠い場合に於てのみ、爲し得る事で有つて、間隔の極めて少い、先づ互角と云つたやうな所では、取る可き道であるまい。

であるから、保育的な態度は、之を博覽强記にして、而も燃犀なる批評眼を有する他の諸先生に讓り、余は、乃ち齡こそ重ねてをれ。識見に於ては被評者に比し、僅に一日の長あるに過ぎざるに鑑み、初めより若武者の無遠慮な態度に出でやう。妄評の罪は甘んじて受くる覺悟で。

勞頭小器用な模倣と喝破したが、更に飽くなく、あたらしき感に打たれたのは、努力の不足な事である。是は尤も悉くに就いて言ふのではない。隨分と構想に整容に、努力された痕迹の顯著なのもあるが、一二篇の如き、書き流しと謂つて可然位杜撰なのがある。最新日本の忌はしき風潮にかまけた結果、勞を吝まるゝのではなからうかとまで疑はるゝ程、眞摯な態度に缺如たるものゝ有るのは嘆はしい。露伴が「一口劍」を物するに方り、洗練又洗練推敲又推敲、あれだけの作品中に、同じ文字を二回使用する事すら、極力避けたと言ふではないか。末技と道つてのければ、夫迄だが、構圖、布置、着色など、皆それ〴〵甚大の注意を拂つた上、所謂字句の末迄も、諸を忽にせなかつた謹愼は吾れ人ともに彼に習ふべきである。『縱令讀者は、龍南の一小天地に限定されてゐるにしろ、七旬の長日月を前にしての、詩神の爲めの晴れの仕合ではないか。緊張味の無い、敬虔なる風槩の缺如せる、だらし無き書き振りは藝術の神に對しても、誠に不相濟義と考へて貰ひたい。獅々は小鼠を搏つにすら、尙且全力を以てするではないか自然の風物の點綴振りには、何れも割合に成功して居る樣ではあるが、一勿論、中には、配合ひ方が餘りに餘りに多きに失して居るが爲になか〳〵に五月蠅い位に感せさせられるのも無いではないが一性格描寫と來ては、一般に徹底を缺いでゐる筆數が不充分である。不充分でゐて、而かも要處に觸れてゐない。當然の歸結は、人物が朦朧として把握し難い。で此點に於ては、我々は第十九世

紀、二十世紀の文章を覗て居るのではなくして、上代と迄は得言はないが、何だか中世紀か近世紀の前半といつた頃の文を繙いて居る樣な緣遠い、從つて物足らぬ氣分に襲はれる。といつて、余は細筆以て此缺漏を補塡せよと、必ずしも道ふのでは莫い。ロダン式の疎放な刻み方、甚だ結構、要は登場人物の、各其性格に應じて、飽く迄も鮮に其輪郭を發揮し乍ら、吾人の面前に活躍するやう毫を揮ふて貰ひたいと曰ふのである。

更に、內的描寫、心理解剖の如きに到りては、一層其痕迹の寥々たるを見るのである。這は併し、叙景の如うに、一寸誰にでも眞似の出來る藝當では非いからであらう。丁度哲學が自然哲學に、詩が叙事詩に、其端を發し、漸くにして純正哲學に抒情詩に向ふ樣に、一箇人としても、一民族としても、將た一國としても、先づ心外の物象を捕捉するに肇まり、隨分と長年月を重ねた揚句、玆に初めて僅に心の堂奧へと、探究の步を移し得るやうに、文林に分け入る我れ人の踏む道程も、當初おしなべて若きと、文化の程度低きとは、好むで自然の風物を描出するの易きに就きたがるものであつて、滅他に複雜多端、難透難解な內觀的叙述に筆を染むるものでは莫い。否未だ染め得るものでは莫いが、一箇人にしてからが、一國にしてからが、追ひ〳〵に進步發達せむか、文壇は何時いつ迄も、恁うした要素の缺乏、偶ま存在して居ても、此要素の不深切、不徹底に甘ずるものではない。又さうした幼稚な段階に停滯するのを潔しとするものでも莫い。此道理よりして、余は、今後とも切に諸君の此方面に多大の勢力と、甚深なる注意を拂はれん事を希望して止まないのである。枝葉の叙說に魂を奪はれて本末輕重を忘却し、其本論に對する要不要の度合を商量考覈もしないで只もう岐路に彷徨して前後不覺の觀を呈する人が殘念ながら、今度の應募者中にもある。評者嘗てゲエテが「親和力」、エミイル・ゾラが「ナ、」を通讀した事があるが、隨分思ひ切つて挿話に沒頭してゐる氣に見ゆる所もある。が併し「親和力」や「ナ、」程の雄篇大作になると、傍徑に入つて縱令道草を喰つた所で、澤山喰つたにした所で、左程

本筋の通り鹽梅に邪魔になるものでは莫い。恰も大々的園遊會に、一人二人の泥酔漢が現はれたからといつて、格別目立たない樣に。而かも況んや一見前後不知の体裁も、其實立派な遠慮があつての傍系的長談義であつて見れば、是れあるが爲に本來の思想は愈よ明瞭を加へ、深刻を增すものすら在るに於てをやだ。然るに此度の或作品の如き全部で辛く四十頁内外なるに、本領の發揮未だ充分ならざるに不拘、之をしも放棄して、悠々夜景の叙述に一切を擧げ盡さずんば止まざるの概有るは！其僻、さる詳記絮說の多く必要有るに非ず。只僅に某女學生に其處にて邂逅させんまでの舞臺たるに過ぎざるを見れば、私に例の節制を忘れて得意の領域に淹留し、本船の方向、目的を觀念せざる遣り口だと惟ふたが什麼に。

文字に宛字や、康熙字典に求めても出て來さうもない御手製の字や、假名使ひの亂暴なのが・依然今度のにもある。中には滑稽に近いのも在る。がしかし此種の不完全は、確に一と頃とならず數に於て咸退して居るだけは祝す可しだ。

首尾ある樣に、まとまりの有る樣に、Ias Gauz として存在する樣に、即ち藝術品として文章として生命の有る樣にと努力された形跡を、應募文の多數に見出し得た事は、茅出度き現象だと思ふ。願はくば、此傾向の持續せらるゝと共に、枝葉末梢の那邊迄も、枝葉末梢として扱はれん事を。

以下箇別的に、品隲を試みやう。

大伴家持　流暢に書き成されてゐる。夜明珠の盤に和して托出するの風情が有る。首尾あり發展あり、見事に纏りの附いて居るのも嬉しい。蓋し最も切瑳琢磨されたものであらう。併し恁うした筋は決して新しいとは稱へまい。慾には時代的色彩を今一層濃厚に施して貰いたかつた。何年何月何日と迄附記された手前もある。詞は大正でも支障へ無いまでも、環境が未だ充分天平寶字(?)に成つてゐない樣な心持がする。此注文は、あれ位の短篇物には至難かも知れぬが逍遙の「義時」などは、此點に於て特別成功してゐる。

涙の日記　確に慎慮の點に於て缺ぐる所がある。

筆が若い。「流寒」「此感肯には低抗力」「宇寅の眞理」などは振つてゐる。但し此作者の原稿には、細心の注意もて尋ねたら、每頁屹度平均三四の文字上の誤謬がある。思出思き事ぬ」「腸膣扶窒の審議を受けて」などは、「不注意ではあらうが、恐縮せざるを得ない。「勿論生花、禮法、料理、花の湯位は、學校に於て、家庭に於て、習つてゐたから、主婦下女三人（主人主婦下女三人？）の別天地の生活には左程不自由を感じなかつた」との文句も、强て解すれば解せられぬ譯では無いが、何だか續き工合が變だ。其外四段活や、下二段など無視せられてゐるのも亂暴だ。序だから一言するが、字格の作者に不分明なのを、作者は行書でもつて、變にごまかさうとする惡僻がある。改めて貰ひたい。內容上の批評は暫らく見合はす事にした。

第二の母。舞臺は立派に朝鮮になつてゐる。着想に見る可き點が無いでも無いが、人物がどれもこれも、幾んど同樣の色調を以て畫かれてゐる遠近が無い。濃淡の差に乏しい。自然の風物を織り込む手際に瞻上げた箇所が、少なからずあるやうだが、餘りに此手腕を弄し過ぎる弊がある。吾等聊か當てられ氣味だ。動もすると挿話にかまける風がある。這うした作品には、題材の性質上、心理解剖、心裡描寫が、極めて必要であるに關はらず、さうした分子が、意外にも頗る少い。繼母の境遇は、自體心的分析を强求して止まないものだと想ふが否か。尤も作者は主人公を始め各人物に對し、相應に筆數を費してゐない譯ぢや無い。否隨分箇性の開發に盡力して居るのだ。が併し生憎琴線に觸れてゐない心裏に渡つてゐない。徒らに心外に彷徨してゐるのみだ。偶ま心內に入る事か有つても、僅に玄關の敷居を跨いだ位の所だ。夫れ故に人物、殊に、心的分析を無上に要求する主人公の面影が、茫然として幽靈じみて見ゐるのだ。誰か隔靴搔痒の感なきを得むやだ。

戲畫。自己經驗の告白である。詩に必要な想化に不足がある。結末に「戲畫」と題せる理由を聞かせてゐるのであらう。小說には成つてはゐるが

吾人は今日恁うした種類の小品には可なり遭遇し過ぎてゐるので、今更珍とする事が出事ぬ。寫實に僞りの無い一氣呵成的の文であると評す可きであらう。下火になつた自然派の香ひがする。詩と稱ゐうより眞と稱ふべきだらう』

山田長政後日譚 語尾が圓熟して居ない。「わ」「ッ」「の」使用法が消化れてゐない。オインの「わ」は女學生めいで聞ゆるのも異なもの。厭に時代せりふの繋ぎ合はしてあるのも氣になる。「死んで花實の咲くものぞ」の如きか、即ち夫れである。さうかと思ふと。戀が此處まで導いてといふやうな新しいのもある。男性女性の台詞に區別の立つてゐないのが段々ある。偶然の無い戲曲は無いにしても、偶然は劇に極力姿を現せさる樣、作家に於て豫め工夫す可き筈であるに、此處に隱棲し給ふとは、夢更想ひも寄らぬ邊に、オインの偶然道を失して、迷ひ入るまでは可いにしてからが、長政の股肱の臣が、主命を銜むで、姫の後を追ふや、これ亦偶然同じ伏屋に落合ふなどは、偶然の盛り方が、ちと過ぎはせずや。

この劇は、短篇でゐて、二段切れの氣味合ひに禍いせられて居るが爲に、連合の痕が著しく目に着く。默阿彌の「桃山譚」ほど無緣の二物を接合した物では無論無いが、沙翁が『ベニスの商人』程の二面劇に墮してゐる。其結果、劇に最肝腎な筋の一致が、大に毀損されてゐる。題名は素り符牒までではあるが、儻か實を表示すべきでありとすれば、此篇の如く應に「オインサンテオ」戀物語附長政最後」とでもあるべきならむか。最初の間は、寧ろ長政が主人公の樣でもあるが、後には彼は單に影武者となり、オイン、サンテオの兩人が、正面の人物となつてゐる。短篇の僻に、取捨が無い。あれもこれも皆書かうとした。夫れ故あゝした悲劇的終末を遂げしむる程の熱烈な戀に對し、準備が皆無である。藪棒然となつてゐる。サンテオの隱家まで進むでから、戀愛關係を物し始めるのは、抑も遲い一人一人舞臺で殺すさへ、仲々用意が入る。豫備が必要だ。因果律の鎖を辿つて行かねば

ならぬ。突發的では、眞正な意味に於ける劇には成らぬ。況んや二人までも殺すのだ。饒使リヒヤアド、ワグナアの處女作ほどに澤山殺さぬにしても。看板通り長政が後日譚を以て終始するか、或は逆臣の息子と長政の息女との戀を以て終始さるゝか、二者の中一を選出されたらむには、大事の大事の戲曲的一致は保全されたらうものをと思ふ。之が長篇ならば、挿話的に兩人の戀を畫く事は、若し成功だにせば、殺伐な雰圍氣中に、ゐならぬ風情を添ゆる事、丁度シルレルが「ワルレンスタインが最期」中のテクラ、マックスの情話の如きものがあつたらうに。

如上叙、双頭の蛇に化つたが爲めに、旃之どの役者にも此役者にも華を持たさうと努めたが爲に、全體が緞帳張りに流れ、折角の力味も、場當り式と化し了つたは愛しむべしだ。長政の最後を豫言してゐる邊は、てツきり沙翁のジユリヤス、シイザア其儘だ。

序に「誅殺」とか、「連緬」とか、「姑つた」など、折節妙な熟字の使つてある事を指摘して措く。

戲曲は文學の精華だ。叙事詩と抒情詩との化合物だ。對話を命とする。從つて、之に着手する人は、人一倍骨が折れる。其勢が、小說界に偉大な進歩を見たに關はらず。戲曲界は大正の今以て依然として大勢は、舊套を墨守するばかりだ。日本純文學の革進は、此方面に於て尤も多く要請せられてゐる。此理由よりして余は作者今回應募者中唯一の劇作者たる蓼汀氏に向つて倍蓰の奮勵努力を祈る次第だ。

或男の手記　小說は歷史ではない歷史には、有る間敷事も起り得るのである。だが小說には。有り得ざる事は、許容れのないのである。――初から架空的なのは別として――這麼事を事新しく說く必要は無いのであるが、此作品を繙くと此邊から出發せざる可からざる樣感ぜられるのである。といふのは、或男に欺瞞され方が、どうも實際に有り得ざる事であから言ふのである有る間敷事でも有り得る樣書くならまだしもだが。一寸一例を擧ぐると、世の塵を踏むで來てゐる看護婦が僅かのなぢみで大枚三十圓を貸す

のも、易々身を委するのも、又以前よりの近附きといふでも無いに、佐多未亡人が生活に餘裕の有るでもないのに、わい子諸共二週間前後も僅少の金子で宿泊を許すといゝ、一として成程と會得し得られるのは無い。

次に時間的にも不合理が有る。劈頭に「今更御手紙差出す面目も無いのですが、數日に迫つた出獄を扣へて」とあり、末尾に、「二年の懲役の宣告を受けました。監獄に入つてからは」云々とあり乍ら、右の手紙の宛主であつて、同時に或男の無上の畏敬者である男と下宿屋の山内とかで對面したのは正に「去年の十一月の二日」とある。此三材料を綜合すると、數理家でなくとも、忽ち違算の有るのに氣が附く。右はてつきり、時間的錯誤と思ふが什麼に。作者の說明を仰ぎたい。

それから單に駄羅〳〵書くのが能でない。詩には醇化が必要であると言ふ事が、一寸閑却されては居りはせないだらうか。一言以て之を蔽へば注意が周到でない。

勝者の喜びと悲しみ　餘りに雜駁な感がある。集中が出來てゐない。猥りに多數の人間を紹介する弊がある。もう今度こそ最後ならんと想ふと又新人物が出頭に及ぶ。構圖とか結構とか、文章の經濟とか言つた樣な事項は、幾んど全く顧みられてゐない傾向がある。漫然たる書き流しだ。叙景にも無用有害なのが少くない。想にも形にも、まだ〳〵精錬の餘地が充分に在る。蓋し蕪雜粗笨の評は免れ難たからう』

春より夏へ　文章は達者だが、書き過ぎる病がある。此作者のは局部奉仕に念が入り過ぎる。局部描寫に耽溺し出すと、其局部が全體に果して幾何の價値を有して居るものか、頓んと其邊の斟酌が無い。何に二三行で澤山の所にまで細筆を弄する。腦病院の光景が細叙されてゐる。恁程の細筆必すや後段に因緣なからずやはと、評者は勞を吝まず之を記臆の藏に納めて、最終まで擔ぎ廻はつたが、結局通り掛りの叙景に過ぎなかつたのを發見し、不一方失望した。畢竟擔ぎ廻はさせられた丈の勢力は浪費になつた譯だ

凡そ作者たるものは能ふ限り讀者の勢力を有効に消費せしむるやう。工夫焦慮すべきでなからうか。

夫れから「夕涼よくこそ男に生れたれ」の邊から電車がやれ甚麼したの、街道が水が撒かれたの大學目藥の看板がどうの、そら活動それ管簾、それ瀧と目眩しき計りの細叙だ。――而して詮ずる所一女學生に邂逅するの場面だ。此文の初に當り道ふておいたやうに。

今一つ作者よ。叙景は本來繪畫の領域なるを。記憶されよ。其詩に不利なる由は、シッシング既に『詩と畫の境界に就きて』に於て詳論あり。此理由よりしても叙景には余程節制を要する事を憶起される事を。

今一つ最終に「意味なき離合」に就きても、所見を記する積りでゐた。多少の欠點は有りはするが餘には、面白き作、未來の有る作者と見ゐただけ、聊か、より長く書いて見る覺悟でゐたが、最後の日の今日の日曜日に、豫期せざる差支が起つたので、此一篇の批評だけは御免蒙る事にする。誤つて評者に選ばれた度毎に、各篇に對し、妄評を試みなかつた事は、只の一度も無いのである。

從つて恁うした勝手は、衷心相濟まざる氣がするが、愈よ明日は〆切だから致し方がない。(正月廿三日)

○　八波　其月

天平感寶元年五月十五日の大伴家持。家持が青年時代を回顧して自ら咎めるところが氣に入つたうら若い方によくもあんなところが書けたと思ふ。梅雨もしつくり合つてゐる。上出來。

第二の母。月並な家庭小説だが、第三回にほろりとさせる個處があり、第四回の國雄が手紙に稍親しみもある。無難の作。

意味なき離合。何處となく染みもあるやうで、一寸考へさせられる。大した疵も無い。(了)

備考　以上の配列は五十音順。西澤教授は批評なし。